様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年　５月１５日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：２００８～２０１１
課題番号：２０５３０５９２
研究課題名（和文）　青年期から成人期前期までのアイデンティティ発達のプロセスとメカニズムに関する研究
研究課題名（英文）　Processes and mechanisms of identity development from adolescence to young adulthood
研究代表者
杉村　和美（KAZUMI SUGIMURA）
広島大学・大学院教育学研究科・准教授
研究者番号：２０２４９２８８

研究成果の概要（和文）：
本研究の成果は、(1)青年期のアイデンティティ形成の詳細なプロセスは他者との対話に反映されること、(2)対話の中で生起する自己と他者の視点の協応にはいくつかの種類があること、(3)協応の際には、青年の時間的展望の転換が起こっている可能性が見いだされたことである。これらの成果の意義は、アイデンティティ形成のプロセスにおける変化の瞬間に何が起こっているのかをリアルタイムで明らかにしたことである。

研究成果の概要（英文）：
The results of the present study showed that (1) adolescent identity is constructed through the interactions between self and others, particularly through the dialogue or discussion with others; (2) there is a variety of ways in which adolescents coordinate their own perspectives with others' perspectives in dialogue or discussion; and (3) changes in time perspectives may occur when the coordination between an adolescent's own and others' perspectives. These results contribute to clarify part of the real-time change processes in identity formation.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	700,000	210,000	910,000
２００９年度	700,000	210,000	910,000
２０１０年度	700,000	210,000	910,000
２０１１年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総　計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：発達心理学
科研費の分科・細目：心理学・教育心理学
キーワード：教育系心理学、生涯発達、アイデンティティ、青年期、初期成人期

１．研究開始当初の背景

青年にとってアイデンティティの形成は発達の中心的な課題であるが、最も重要な問題であるアイデンティティの形成・発達プロセスには未だ明らかにされていないことが多い。近年、海外のアイデンティティ研究者はこの問題に関心を持ち、いくつかの研究グループが検討を開始している（e.g., Bosma & Kunnen, 2001; Kroger, 2003; Luycks, Goossens ら, 2006）。それらの検討の観点や方法は少しずつ異なるが、変化のしくみへの関心を共有し、アイデンティティは個人内にある静的な状態ではなく、環境と相互調整しながら変化し続けていること、その変化には

自己に対する認知だけではなく情動も重要な役割を果たしている可能性などが分かってきている。

研究代表者も、青年が人生の重要な選択について、自己の視点と他者の視点をどのように相互調整しながら決定するのかという「関係性」の観点から、アイデンティティ形成のプロセスを検討してきた（杉村, 2005）。これらの研究は、関係性に６つのレベルがあることを明らかにしたうえで、大学３年生から卒業までの追跡調査によって、多くの対象者が低いレベルから高いレベルに移行することを見いだした。また、同じ対象者を卒業後５年目に追跡調査した研究では、就職して社会的現実に直面することによって関係性のレベルがさらに高まるとともに、その途上では自己と他者の視点の間に強い葛藤を経験することが示唆された。

さらに、この追跡調査のデータを詳細な事例研究によって再分析したところ、レベル間の移行はいくつかの変容のルール（e.g., Fischer ら, 1998, 2002）によって特徴づけられ、とりわけ自他の視点を統合する直前には、両方の視点を行ったり来たりする不安定な状態があることが分かった（杉村, 2005；Sugimura, 2007）。

研究代表者のこれまでの研究は、アイデンティティを環境（特に他者）との関係で捉える点、変化のしくみを一部明らかにしたという点で、海外の研究の動向と一致する重要な問題に迫っている。しかし、次のような課題がある。

（１）これまでの研究では、関係性のレベルの発達的順序がまだ十分に明らかにされていない。

（２）ある関係性のレベルから次のレベルに移行する際に見られる特徴を、リアルタイムで検討する必要がある。

２．研究の目的

本研究の目的は以下の２点であった。

（１）長期縦断研究により関係性のレベルから見たアイデンティティの発達的な方向性を検討する。具体的には、研究代表者がこれまで大学３年生から卒業までの３時点および卒業後５年目に追跡調査を行った約 30 名の対象者について、卒業後 10 年目の追跡調査を実施し、11 年間（計５時点）にわたる関係性のレベル変化とその要因を明らかにする（研究１）。

（２）短期縦断研究により関係性のレベル変化のメカニズムを明らかにする。具体的には、大学生を対象とする約６ヶ月間の短期縦断研究を実施し、レベル移行のプロセスをリアルタイムで記述する（研究２）。

３．研究の方法

本研究では、長期縦断研究（研究１）と短期縦断研究（研究２）を組み合わせた。

（１）研究１

1998 年に大学を卒業した女性 30 名に対して面接調査を実施した。面接項目は、関係性の観点から見たアイデンティティを捉える項目、レベル変化の認識、前回調査から今回までに経験したライフイベント、環境（職場・家庭）との関わり、重要な他者との関係の変化、社会への認識の変化などを捉える項目などであった。

（２）研究２

①複数の個人における推移を重ね合わせて確認する multiple case study（Fogel ら, 2006）という新たな方法を援用するため、方法論の検討を行った。具体的には、170 名の大学新入生を対象にした５週間の短期縦断研究で、大学新入生が直面しやすい学び領域のアイデンティティの危機に焦点を当て、他者(同じ学生の仲間)との対話からアイデンティティが構築されるプロセスを検討した。

②12 名の対象者（大学新入生）を約６ヶ月間にわたり追跡し、週１回のグループ討論、リフレクションシートの記入（アイデンティティの各領域に関する他者とのやりとり、それを踏まえた自己内対話、その時の情動）などによってリアルタイムのアイデンティティの変化を把握した。

③グループ討論の長期的なアイデンティティ発達への影響を検討するために、同一対象者について、調査終了１年後のフォローアップ調査を行った。

４．研究成果

得られた成果

研究１および研究２のデータ収集を行ったが、研究１については助成期間内にすべての分析を終了することができなかった。そのため以下では、研究２を中心に現在までに得られた結果を記す。

（１）方法論の検討のために行った予備的研究の結果、他者（本研究では仲間）との対話を通してアイデンティティが発達することが見いだされた。その際、青年が自己の視点を他者の視点と協応するしかたには、次の５つの種類があることが分かった（Sugimura & Shimizu, 2011）。

①sharing problems：現在取り組んでいるアイデンティティの課題に関する自分の気づきや不安と、他者のそれらとの脇応。同じ問題に直面することを共感しあうことにより、アイデンティティ探求への推進力を得る。

②finding a key phrase：現在取り組んでいるアイデンティティの課題に関する自分の気づきや不安と、他者がそれらをうまく描いたフレーズとの協応。他者との間で短いフレーズを共有することで、直面している問題を

明確に理解することが助けられ、探求の道筋を示唆される。
③admiring a model：現在取り組んでいるアイデンティティの課題に関する自分の未熟な見方と、他者のより進んだ、探求への刺激となるような見方との協応。モデルとなる他者と自己を比較検討することによって、自己の視点を客観視し、探求に踏み出すことが可能となる。
④embracing a positive view：アイデンティティ形成に関して自分が現在直面している困難や障害と、同じ状況について他者が抱く肯定的な見方との協応。自分が直面する困難や障害に対するまったく違った見方があることを知り、問題を外在的な原因によるのではなく、自己の見方によると考え、探求を動機づけられる。
⑤accepting new ideas：現在取り組んでいるアイデンティティの課題に関する自分の視点と、それとは異なる自分では気がつかなかった他者の見方との協応。自己の視点を拡大したり深めたりして、新たなコミットメントを形成することを促進する。

また、青年が他者の視点と自己の視点に協応するために、他者のどのような視点や行為が有効であるのかを検討したところ、次の５つが見いだされた（Sugimura & Shimizu, 2010）：identity concern, identity goals, identity clues, companionship, bridging。

以上のように、自他の視点の協応の種類を、青年（自己）の側と仲間（他者）の側の両方からカテゴリー化したことで、関係性の変化をリアルタイムで捉える際に注目すべきポイント（関係性のパターン）を明らかにすることができた。

（２）この結果に基づき、大学新入生 12 名を対象にした 15 週間の大学への初期適応を通したアイデンティティ発達のプロセスとメカニズムに関するデータを分析し、どのような条件のもとで関係性のレベルの変化が生起するのかを検討した。具体的には、12 名それぞれについて、グループ討論における関係性のパターンの推移を記述し、他者の発言、他者との対話、それを踏まえた自己内討論、およびそのときの情動が、関係性のパターンの推移とどのように関連しているのかを検討した。その結果、次のことが明らかになった。
①関係性のレベルが低いレベルから高いレベルに移行するプロセスにおいて、他者との対話の中に、予備的研究で見いだされたカテゴリーと同様の、多様な関係性のパターンの継起が見られた。
②これらのパターンの中に、時間的展望の転換を示す発言が出現したときに、レベル変化が起こる可能性が示唆された。

成果の国内外での位置づけ・意義

（１）関係性の観点からのアイデンティティ理解の推進

本研究の成果は、アイデンティティを他者や環境との相互作用の中であらわれる開かれたシステムとみなすことで得られたものである。このような観点は、海外のアイデンティティ研究者の関心とも共通する。しかし、実際に自己と他者との相互作用そのものを詳細に捉えた研究はほとんどない。したがって、本研究の成果は、内的・外的な諸要素をどのよう統合してアイデンティティを形成するのかという、メカニズムの解明に迫る第一歩を築くことができたと考える。

（２）自己の視点だけではなく他者の視点への着目

アイデンティティを他者や環境との相互作用の中で構築されるものとしてみなすと、青年（自己）の視点だけではなく、関わる相手である他者や環境から提供される視点や働きかけの性質が問題となる。海外でも他者の視点を分析することの重要性が指摘されているので、本研究の成果である他者（仲間）の視点や行為に着目したカテゴリーの生成は、そうした動向に合致する。このことは、本研究の成果が、Identity 誌の「Agents of identity: A focus on those who purposefully influencing the identity of others」の特集号に掲載されたことからも裏付けられる。

今後の展望

助成機関内にすべての分析を終えることができなかった。その主な理由は、研究２の主眼である、発達の変化プロセス、発達における創発を捉えることのできる新たな方法論（multiple case study およびダイナミック・システムズ・アプローチ）をを身につけ、データ分析に適用することに、当初の計画以上に時間を要したことであった。予備的研究の成果が国際的な学術誌に掲載されたことから、本研究に意義があることに変わりはないと考える。したがって、研究機関終了後も、引き続き研究を継続する。具体的には次の２点を考えている。

（１）研究２の分析を行うことが必要である。研究機関内に方法論の勉強をおおむね終え予備的な分析に着手することができたので、本格的な分析を遂行する計画である。

（２）研究１と研究２の成果をとりまとめ、長期的なアイデンティティ発達と短期的なアイデンティティの変化の関係を解明する計画である。いずれも新たな方法論を適用して行う分析であるため、ある程度の時間が必要である。したがって当初の計画より遅れたが、これに沿って継続していく。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２　件）
1. Sugimura, K., & Shimizu, N. Identity development in the learning sphere among Japanese first-year university students. Child and Youth Care Forum, 査読有, 2011, 40, pp25-41.
doi: 10.1007/s10566-010-9118-2

2. Sugimura, K., & Shimizu, N. The role of peers as agents of identity formation in Japanese first-year university students. Identity: An International Journal of Theory and Research, 査読有, 2010, 10, pp106-121.
doi: 10.1080/15283481003711734

〔学会発表〕（計４　件）
1. 杉村和美　発達における変化プロセス（ラウンドテーブル企画), 日本発達心理学会第22回大会, 2011年３月25日, 東京学芸大学.

2. Sugimura, K. Change in educational policies and identity formation among university students in Japan. The 18th Annual Conference of the Society for Research on Identity Formation, February 5, 2011, Daytona Beach, USA.

3. 杉村和美　関係性の観点から見たアイデンティティ発達（岡本祐子企画　自主シンポジウム「アイデンティティの生涯発達における『個』と『関係性』をどうとらえるかー理論的再考と実証研究の方向性ー」), 日本発達心理学会第20回大会, 2009年３月24日, 日本女子大学.

4. Sugimura, K. & Shimizu, N. Identity development in the learning sphere among Japanese first-year university students. The 16th Annual Conference of the Society for Research on Identity Formation, February 28, 2009, Pacific Grove, USA.

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
杉村　和美（SUGIMURA KAZUMI）
広島大学・大学院教育学研究科・准教授
研究者番号：２０２４９２８８

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
浦上　昌則（URAKAMI MASANORI）
南山大学・人文学部・准教授
研究者番号：００２９８５４８

高村　和代（TAKAMURA KAZUYO）
岐阜聖徳学園大学短期大学部・幼児教育学科・准教授
研究者番号：１０３１０５３３